

第二代総裁 富田鐵之助

とみたてつのすけ



【総裁任期】

明治21年(1888) 2月21日～明治22年(1889)9月3日

「日本銀行総裁」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？ この「歴代日本銀行総裁小史」のコーナーでは、歴代総裁の生涯をたどりつつ、総裁在任時に取り組んだ事跡や当時の日本銀行の歴史などをご紹介していきます。今回は第二代総裁の富田鐵之助です。

富田鐵之助は、天保六年（一八三五）に仙台藩士の家に生まれました。安政三年（一八五六）、藩命により江戸で西洋砲術を学び、帰藩後に藩の西洋砲術の先生になりました。文久三年（一八六三）、再度、藩の命で江戸に上り、幕府の海軍奉行であった勝安房守（勝海舟）の私塾「氷解塾」に入ります。その勝の推薦により、慶応三年（一八六七）には、米国に留学し、主として経済学を学びました。なお、米国に留学する際に乗船した米国船コロラド号には、後の第二〇代内閣総理大臣・第七代日本銀行総裁の高橋是清も乗っていました。

米国留学の翌年、明治維新を迎え、幕府からの留学生は帰国を余儀なくされた中、富田は学業優秀であったことから、そのまま明治政府の留学生として認められ、留学



横浜正金銀行は、国立銀行条例により明治13年(1880)に設立された。写真は明治37年(1904)に建てられた同行本店。現在、神奈川県立歴史博物館として利用され、国の重要文化財・史跡に指定されている。(写真提供：神奈川県立歴史博物館)



明治22年(1889)発行のお札の左側には富田鐵之助の筆跡で「日本銀行」と記されている。



富田の故郷宮城県仙台市にある東華学校(宮城英学校が改称)の遺址碑。富田のほか、新島襄など学校設立関係者の氏名が刻まれている。(写真提供：同志社東京校友会)

を続けました。明治五年(一八七二)にニューヨーク領事心得に抜擢され、副領事に昇格した後、在英國公使館一等書記官を務め、帰国。帰国後は大蔵省(現在の財務省)に移り、日本銀行創立の事務を担当しました。明治十五年(一八八二)の日本銀行設立とともに、日本銀行副総裁に就任します。初代総裁吉原重俊(注1)とともに、大阪支店の設置や不換紙幣(注2)の整理、兌換銀行券(注2)の発行など重要案件に取り組みました。

初代の吉原総裁逝去後の明治二十一年(二八八八)、第二代総裁に就任します。総裁就任後も副総裁時代からの懸案事項に取り組みました。しかし、従前大蔵大臣から要請されていた、外国為替専門銀行である横浜正金銀行への低利融資枠の大幅拡大について、引き続き拒否したことがきっかけとなり、辞任します。総裁在任期間は一年半と短いものでしたが、副総裁在任時から通算七年にわたり、富田は、日本銀行の創業期において中心的な役割を果たしたといえるでしょう。

総裁辞任後の明治二十三年(一八九〇)、帝国議会が開設された際には、貴族院議員に勅撰され、その職を二五年にわたり務めたほか、東京府(現・東京都)知事も歴任しました。経済界においては、富士紡績(現・富士紡ホールディングス)や横浜火災海上保険(現・あいおいニッセイ同和損害保険)の創立に尽力しました。また、共立女子職業専門学校(現・共立女子学園)や宮城英学校(後に東華学校と改称(明治二十五年閉校)の設立に関わるなど、人材の育成にも力を注ぎました。

そのほか、自身の結婚に際して、日本で初めてといわれる夫婦契約証を取り交わし、当時の新聞に取り上げられました。

富田は、大正五年(一九一六)二月、満八〇歳で死去しました。同年五月、故郷宮城県仙台市で追悼会が催され、政官財界人をはじめ多くの人が別れを惜しみました。

(注1) 不換紙幣/正貨(金貨・銀貨など)と引き換える保証のない紙幣。
(注2) 兌換銀行券/同額の正貨と引き換えることのできる銀行券。